



編集後記

最近のテレビを眺めていると、気になる言い回しに違和感を覚えることが多々ある。

もともと言語というものはたゆまなく変遷していくものであり、昨今話題になっている「ス体」や「ら抜き言葉」などはその類に属するものであり、それは筆者のような頑迷な年寄りが単に時代に追いついていないだけで、いずれ新しい世界に根付いていくものなのである。

英語でも、元来は乗合馬車を意味する「Omni bus」という単語が略されて「bus」になり、そして「bus」になってしまったり、前掛けを意味するエプロンが、元来は「napron」という単語であったのに、冠詞の「a」が付いた際に「an apron」が「an apron」へと変化して、そこからさらに冠詞「an」が外れて「apron」になってしまったりという慣用句（イディオム）の例もある。しかし、人の行動や意思を伝える際に「〜だとか」で言葉を切ってし

まう用法や、料理などが供される際に「〜になります」、さらに某かの原因を伝える際に使われる「〜です」といった用例には、言葉の変遷とも異なる違和感を禁じえないのだ。

例えば「〜だとか」と来れば、それに続くのは同じようなものの列挙であろう。ところが現代では「〜だとか」と言ったきりで後が続かない。断言しない。つまり発言者が責任逃れをするための余地を残す意味合いで使われている傾向が多いように思えるのだ。「〜になります」は往々にして「こちらの方カレーライスになります」といった使われ方をするのだが、供された既にどう見てもカレーライスに見える代物は、それがいかなる過程を経て更にカレーライスに変化するのか。序でにその前は何だったのか、どんな手法を用いて変化させたのかを聞いてみたくなる。そして「〜です」である。筆者が知る限り、これは言い訳の類のことばであり、いささか下卑た

言い回しであると思うのだが、これが今の放送では頻繁に登場する。元を正せば、「〜だとか」は「〜だそうです」、「〜になります」、「〜です」はともに「です」で良いはずである。

断定することをしない、こうした言い回しは、自らが責任を取りたくない立場にある役所や政治の場で登場することが多い。そして往々にしてその発言が生み出すのは「責任を取らない（取りたがらない）責任者」なのである。

編集に携わる身として心強いことに、ご承知の通り、本誌の執筆陣は折り目正しい日本語を使われる方ばかりである。直接お会いしても、常に正しい日本語が発せられる。

編集者として、こうした執筆陣の皆様にたいして「だとか」「だの」「になります」だの「〜です」だのといった、責任逃れを感じさせる恥ずかしい日本語を使うことがないように心がけたいと思う昨今である。

(溪)

月刊 公論

9月号 第54巻9号

令和3年9月1日発行 毎月20日発売
本体価格1,100円(税込) 送料87円

発行人 大 中 吉 一 編集人 林 溪 清
発行所 株式会社財界通信社

〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ポナフラービル
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616

印刷所 株式会社廣済堂

取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

- 直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。